



Data

監督: 大森立嗣
 原作: 森下典子『日日是好日「お茶」が教えてくれた15の幸せ』
 出演: 黒木華/樹木希林/多部未華子/原田麻由/川村紗也/鶴見辰吾/鶴田真由/滝沢恵/郡山冬果/岡本智礼/山下美月

👁️👁️ みどころ

全身ガンでいつ死んでもおかしくない! 自分でそう言っていた女優・樹木希林が、2018年9月15日、75歳で逝去! そんな彼女の遺作となったのが、10月13日に公開された“お茶の映画”たる本作だ。

主演は女優・樹木希林の跡継ぎ候補 No.1 の個性派、演技派の黒木華。すぐわからないもの(=茶道)を通して、20歳から44歳までのヒロインが会得した女の生き方とは・・・?

「日日是好日」の意味は簡単なようだが、奥行きは深い。ヒロインは44歳にしてやっとそれを理解したようだが、さて、あなたは? 樹木希林の生きざまと重ねながら本作を鑑賞し、あわせてその意味をしっかりとらめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 去る9月15日、女優・樹木希林逝去! ■□■

去る2018年9月15日に、女優・樹木希林が亡くなった。TVはすぐにそれをテロップで流し、翌日の新聞各紙はそのニュースを報じた。また、TVでは連日その話題で盛り上がった。他方、シンガポール出身の写真家レスリー・キー氏は、『あん』(15年)で樹木希林を主役に起用した河瀬直美監督と相談して、9月20~24日、奈良で追悼写真展を開催した。また、何と10月29日付朝日新聞の両面1ページで、宝島社は、内田裕也、本木雅弘ら家族と共に正装姿で写る彼女の写真と共に「あとは自分で考えてよ。」と題するメッセージを載せた。さらに、同日付読売新聞の両面ページで、一人着物姿で大きく写る、舌を出した写真と共に「サヨナラ、地球さん。」と題する追悼のメッセージを掲載した。

その費用は莫大なものだろう。また、そこに書かれた樹木希林さんの文章は一見ごく自

然に出てきた言葉のようだが、その重みと深みはすごい。それをしっかり味わいながら、遺作となった本作を鑑賞することによって、女優・樹木希林の最後のスクリーン上での姿（演技）をしっかりと味わいたい。

■□■原作も本作も“二分法”を肯定？■□■

私は全然知らなかったが、本作は森下典子の『日は好日「お茶」が教えてくれた15の幸せ』（新潮文庫）を原作とした、“お茶の映画”。主演した黒木華は本作のパンフレットの中で「お茶の映画ですけれど、茶道に関わっていない方も楽しめる映画だと思えます」と語っている。茶道や華道には何の興味もない私は、本作が女優・樹木希林の遺作でなければ観ることはなかったもの。予告編を観ても、本作を観たいとは全然思わなかった。9月15日の死亡にタイミングを合わせたかのように10月13日から公開された本作は、連日大ヒットで満席続き。『カメラを止めるな！』（17年）は若者が次々と押しかけて大ヒットになったが、本作はそれほどの熱気はないものの、老人客でいっぱいだ。

本作を観て私がはじめてわかったのは、パンフレットにある山根貞男（映画評論家）氏の Review のタイトル通り、本作は「静」と「動」の織り成す女性映画だということ。また、茶道について私は全くわからないが、パンフレットにあるミヤケマイの Essay のタイトルは「簡単なものほど会得するのが難しい。人生そのものである。」だし、Story の見出しには「世の中には、“すぐわかるもの”と、“すぐわからないもの”の二種類がある。すぐにわからないものは、長い時間をかけて、少しずつ気づいて、わかってくる。子どもの頃はまるでわからなかったフェリーニの『道』に、今の私がとめどなく涙を流すことのように。」と書かれている。たしかに、フェリーニの『道』は子どもが観ても何の映画かサッパリわからないだろうから、この説明には納得だが、「すぐわかるもの」と「すぐわからないもの」という二分法は、朝日新聞をはじめ近時の“識者”たちがいつも反対している考え方ではないの？

来たる11月6日にはアメリカ大統領の中間選挙が行われるが、“トランプ批判”のひとつは、何でもわかりやすく二分する“トランプ流二分法”への反発のはずだ。来年2019年に弁護士生活45年となる私は、弁護士という職業上“二分法”が大好きだが、それでも何でも二分法で対応できるとは考えておらず、中間の曖昧な道である“和解”を目指すことも多い。しかし、原作も本作も茶道を通じてだが、「世の中には“すぐわかるもの”と“すぐわからないもの”の二種類がある」と断言しているし、本作を観れば冒頭から樹木希林演じる武田先生もそう考えていることがよくわかる。しかし、近時はこのような考え方（価値観）や教育方針は批判され、否定されてきたのではないの・・・？

■□■女の生き方を“二分法”で考えれば■□■

日本にはかつて“良妻賢母”という考え方があったが、今ではそんな“古い考え方”は

完全に否定されている。しかし、本作冒頭、母親（郡山冬果）から「タダモノじゃない」と評価された武田先生（樹木希林）の茶道教室に通い始めた典子（黒木華）と、その従姉妹の美智子（多部未華子）は同じ20歳の女子学生だが、外見も性格も正反対。二人とも美人だが、典子は日本的美人であるのに対し、美智子は目鼻立ちのハッキリした西欧型美人。また、二人の服装の好みが正反対のように、典子は内向的で、美智子は外向的で正反対だ。

さらに、真面目な性格で理屈っぽいがおっちょこちょい、とも言われる典子は大学4年間で就職を決められず、卒業後は出版社でアルバイトを始めたのに対して、美智子は早々と商社に就職を決めたかと思うと、数年内にパッと仕事を諦めてお見合いをして結婚。すぐに子供も産んで家庭の主婦として幸せに“良妻賢母”の道を選んでいた。ところが、典子の方はお茶の稽古には通っているものの、中途採用の就職試験にも失敗したうえ、恋人の“裏切り”によって結婚話もボツになってしまったらしい。また、茶道教室でも茶道の天才といわれる15歳の高校生ひとみ（山下美月）が入ってきたり、武田先生から「手がごつく見えるわよ」「そろそろ工夫というものをしなさい」と指摘されたり・・・。

このように見ていくと、女のタイプや女の生き方を“二分法”で考えれば、“勝者”たる美智子に対し、典子は完全な“敗者”のように思われるが・・・。

■□■「日日是好日」とは？その理解力はどこから？■□■

中国語の勉強を続けている私には、本作のタイトルになっている「日日是好日」の意味がよく分かったが、1993年に20歳になった女子大生の典子や美智子が「日日是好日」の読み方はもちろん、その意味もわからなかったのは仕方ない。はじめて武田先生の広大なお屋敷内で「日日是好日」と書かれた掛け軸を見た二人は、その意味も分からないままお茶のお稽古をはじめることによって・・・。大学卒業と同時に就職した美智子はお稽古を辞めてしまったが、出版社でのバイトにとどまった典子は、その後も“何となく”“ズルズルと”教室に通い続けることに。

しかし、お茶を始めて二年が過ぎる頃には、典子は梅雨時と秋では雨の音が違うことに気づいたようだ。また、苦手だった掛け軸も「絵のように眺めればいいんだ」と面白くなったり、冬になると、お湯の「とろとろ」という音と、「きらきら」と流れる水音の違いがわかるようになったらしい。このように、典子はがんじがらめの決まりごとに守られた茶道、その宇宙の向こう側に、本当の自分を感じ始めた。というからすごい。なるほど、すぐにわからなくても、武田先生が言うように、形から入って覚え、時間をかける中で自然にわかってくるものがあるらしい。すると、お茶を習い始めて10年、今や30歳になった典子は、「日日是好日」の意味も理解できたの？いやいや、まだ30歳ではそれを理解する境地には至っていないらしい。

他方、結婚に失敗し一人住まいを始めた典子が、大好きな父親（鶴見辰吾）との距離が遠くなったのは仕方がない。もっとも、大学入学と同時に故郷の松山を離れて大阪で一人

暮らしを始めた私とは違い、典子と両親との距離は時間にして30分ほどだったから、会おうと思えばいつでも会える距離。しかし、ある日、近くに来ているという父親からの“お誘い”を「今日はちょっと・・・」と断ると・・・。本作後半からは、それまでの“ほんわかとした展開”から、急に“シリアスな展開”(?)に変わっていくので、それに注目!

まあ、女も40歳近くになれば、経済的にはもちろん精神的にも一人で生きていく術(すべ)を身に付けなければならないが、その時、お茶の道は何を教えてくれるの?そして、40歳を過ぎる頃ともなれば、やっと「日日是好日」の意味もわかってくることに・・・。

■□■掛け軸・茶碗・茶花はサッパリ!女の生き方は納得!■□■

本作はド派手なアクションはないし、舞台になるのも武田先生の茶道教室だけだから、大きな製作費はかかっていないはず。しかし、掛け軸や茶碗にはホンモノの高価なものが使われているから、そのリース代や保険料は相当かかっているはずだ。しかして、本作のパンフレットには「二十四節気」(太陰暦を使用していた時代に、季節を現すため一年を二十四に等分したもの)の解説と共に、映画に使用された主な掛け軸・茶碗・茶花・和菓子の“明細”が載っている。しかし、残念ながら私にはこれもあまり興味のないものばかり。したがって、“馬の耳に念仏”とは、まさにこのことだ。しかし、私には本作にみる典子の20歳から44歳までの女の半生の生き方には、なるほどと納得できる面をたくさん発見することができるので、それを充分楽しむことができる。

おっちょこちょいとも言われるが、真面目な性格で理屈っぽい。本作に見る20歳から44歳までの典子の生き方は、まさに自分でそう分析しているとおりだ。最初の恋は彼女の裏切りによって破れたものの、2度目の恋(?)は順調らしい。また、武田先生の茶道教室では毎年新年に“初釜”が開催されるが、正月に登場する干支の茶碗は12年に一度だけ使うもの。したがって、本作に登場する「戌年」の茶碗を典子が使うのは、2度目。映画の上では、すでに80歳を越えている武田先生が次にこの戌年の茶碗を使う時は、ひょっとして100歳を越えているかも・・・。

女優・樹木希林の75年の人生は今後さまざまな本で解説されるだろうが、本作に見る武田先生の女の生き方は?そして、それにモロに影響を受けたと思われる典子の20歳から44歳までの半生の生き方は美智子のそれとは全然違うものだが、本作の結末を見る限り、それなりに満足のいくものだったらしい。本作を観ても私には掛け軸・茶碗・茶花はサッパリだが、典子の半生の生き方には、なるほどと納得!

2018(平成30)年10月31日記